

大人歴二十五年、少年少女からのメッセージ

『誌』『生命形態学序説』、また本年九月に出版予定の『ヒトのからだ』を是非お読みになるようお勧めしたいと思う。また、三木成夫の思想に大きな影響を与えた、ドイツの生命の哲学者、L・ク

ラーゲスの著作『リズムの本質』(みすず書房)
『性格学の基礎』『性格学の基礎づけのために』
『人間と大地』(以上うぶすな書院)も、お勧めしたい本である。

宮迫千鶴 母という経験

自立から受容へ——少女文学を再読して

山田詠美『ぼくは勉強ができない』

友定啓子

大人を二十五年ほど体験してわかつてきしたこと
は、かつて読んだ物語にでてきた「悪い人」はみ
んな「普通の人」だということだ。たとえば、あ

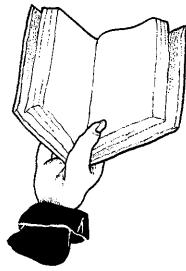
のアルプスの少女「ハイジ」にでてくるわいロッテンマイヤーさんは「普通の人」で、今も日常的に出会っている。自分はゼーゼマンおばあさ

んのようになりたいと願うけれども、ロッテンマ
イヤーさんにならないとは言い切れない。

さて、今回紹介する作品は、大人を長年やつ
てきて、ふと立ち止まりたくなってきた時の書物
である。『母という経験』（学陽書房）の作者宮迫
千鶴さんは人気エッセイストである。中年期にさ
しかかった作者が、かつて少女だった頃に読んだ
名作物語を再読し、今の自分にとっての意味を語
る。作品は『ハイジ』『秘密の花園』『小公女』
『小公子』『あしながおじさん』『若草物語』『ふた
りのロッテ』の七つ。これだけでも十分魅力的な
ラインナップである。たとえば、非の打ちどころ
のない理想的な子ども、『小公子』のセドリック
。「よい子すぎるのも気持ちが悪い」、けれど
「いま、私はセドリックが『天使』であつていい
と思いつつ直している。（中略）この世に長く生きて
汚れた人間が、そういうものをもう一度、『天
使』から学ぶことは幸福というものではない

か」。
私自身の忘れがたいシーンといえば、赤毛のア
ンがギルバートの頭を石盤で思いきり殴るとこ
ろ。この本を読みながらそれは少女の「誇り高
さ」と「やさしさ」を、作者は『小公女』のセー
ラの中を見る。一度「大人の世界」をかいくぐつ
た人のための少女文学論というところだろうか。
それにしても『赤毛のアン』がぬけているのが残
念でならない。

『ぼくは勉強ができない』（新潮文庫）は劣等感
を持った少年の、少し屈折したお話かなと思う
と、さにあらず。他人様と同じ価値観を持たない
高校生、時田君の青春小説。もつとも、これは
堂々としたタイトルからも想像できたのだが。時
田君には父親がない。苦労がちつとも身につか
ない母親と祖父の3人暮らし。この点でも「普



「通」からはずれている。しかし、この家族こそが時田君の愛と自信の源である。時田君の持つている生きる感覚の爽快さが、普通の親や教師が、子どもに守り与えようとしてもがいている価値觀を、逆照射する。大人のたてまえに合わせて動く級友と一線を画す時田君は、感覺的で、思考的で、本質をつく。それゆえ「変わったやつ」と級友からは見られている。作者は言う。「私はこの本で、決して進歩しない、そして、進歩しなくてもよい領域を書きたかったのだと思う。大人にな

るとは、進歩することよりも、むしろ進歩させるべきではない領域を知ることだ」。

この春、私は巣立つ子どもの新しい部屋に寝転びながら、天井を見つめていた。ふと、何年も過ぎ去った日々が消えて、自分がこの部屋で希望に満ちた新しい生活を始めるような不思議な感覚にとらわれていた。我に返つて、そうだ私は母親だったと少しがっかりしたのだ。考えてみれば、子どもも過ごしていた間、私は子どもというもう一人の人間の若々しい世界を自分も同時に体験していた。それは大人である私の、人間としての感情を支えてくれていたような気がする。幼稚園にいても同じようなことを感じる。私は大人になることのしんどさを、ここでしのいできたのかもしれない。一人前の大人になろうとして、なおざりにしてきてしまったことが、私にはたくさんある。おそまきながら大人になることの意味を考え直し始めている。そんな時期にこのふたつの本

に惹かれたのはたぶん偶然ではないと思う。

(山口大学)

付記

『母という経験』は一九九一年平凡社から出版されました。私が読んだのは、一九九五年に文庫化されたものです。

『ぼくは勉強ができない』は平成五年、新潮社から刊行されました、平成八年に文庫化されました。

西脇順三郎の詩

彌永

信美

